

ミャンマー情勢(二)

令和三年十月十五日

加藤 淳

佛・英合作の、「The Lady アウンサンスーチー ひき裂かれた愛」なる、アウンサン・スーチーを主人公とせるいかがはしき映画あり。2011年の制作にして、世界各地、及び日本に於ても上映せられたりとぞ。

こはアウンサン・スーチーの、英國人の夫への純愛をテーマとし、如何にもフランス人の作成せる映画らしく、情緒纏綿と、スーチーの純愛の、「横暴なる」ミャンマー軍部によりて、妨げられたるを描く「お話」なるらし。

西歐人・歐米人の好む斯かる「お話」の系列に、非歐米人の女性が歐米白人の男性に、純愛を捧ぐる物語あり。彼のプッチーニの「蝶々夫人」、フランス・オペラのドリーブの「ラクメ」、マイアベアの「アフリカの女」、ハリウッド映画の「慕情」等、皆然り。スーチーの映画の「お話」も、その一つならずや。

この「お話」に據らば、スーチーはミャンマーに、英國人の夫はブータン研究者なれば(事實は英情報機関MI6のブータン職員)、妻と別れてインドやブータン、或いは英國に住むも、二人の心は常に通ふ(！)。されどミャンマー軍部、二人の通交を妨ぐるを事とし、夫の臨終に際してもスーチー、「最愛の」夫の最期を看取るを禁ぜらる。

このスーチーの「お話」、歐米の観客を喜ばせたるらむ。歐米人にミャンマー(當時は「ビルマ」)なる國を知らしめ、スーチーなる女性に感情移入せしめて、ミャンマー軍部の「横暴」なるを、印象付くるに成功せるに非ずや。我、日本人の、この映画を見たる反應は知らざるも、今の日本のミャンマー情勢の見方、西歐人・歐米人の見方とほぼ同一なるは、或いはこの映画の影響なるやも知れず。

されどスーチーをめぐる事實、この映画とは大きく異なる。ミャンマーの獨裁者たりしネウイン將軍の引退後、一九八八年に、長年國外に在りしスーチー、母親看取りのために

歸國し、これを機に、この國の「民主化運動」始まる。そは、それまで海外在住の人妻、若しくは片手間の大学研究者たりしスーチーならで、その夫と英情報機關こそ、スーチーを利用し、「民主化運動」なるものを始めたるを示すべけれ。

スーチーが夫、再三ミャンマー入國を求めたれど、そは許可せられで、一九九九年英國にて死す。當時スーチー、國會議員にして、野黨の書記長なりき。政府はスーチーに對し、夫の死に立ち會ふべく、英國への渡航を勸奨したれど、彼の映畫の「お話」とは異なり、スーチーそを拒否せりと傳ふ。この人も漸く、彼の夫と英情報機關の、自らを巧妙に操縦せるを悟りて、夫なりし者と、決定的に絶縁するを望みたるか。

スーチーの「民主化運動」なるものを、歐米は一致して支持し、支援せり。歐米主導の國際報道、擧げてミャンマー軍事政權を攻撃し、スーチー支援を惜しまず。スーチー、ノールベル平和賞等、數多の國際的、即ち歐米の賞を供與せらる。上の佛・英合作映畫も、明らかに、スーチー支援の一環として、制作せられたるものならずや。

ミャンマーは、曾て西歐の植民地なりし國の中にありて、最も徹底的に、國の自立と獨立を實現し、西歐の利權を拂拭せる國なれば、この國と、そが實質的自立・獨立政策を主導せる軍人らに對し、西歐人の抱く憎惡感、理解し得ざるに非ず。されど西歐よりミャンマーに近き我が國日本の、ミャンマーを知る人も少からざる人々、何すれど西歐人に同調して、ミャンマーの國を愛し、眞摯に、自國の自立を求むる軍人らを非難するや。

(令和三年九月二十七日受附)